

Bhūtaḍāmaratantra のマンダラ観想法

— BBT、HBT の記述比較 —

藤 井 明

本論文の構成

1 序	159
2 マンダラ観想方法の比較	160
1. 両手に月輪の観想	161
2. および 3. 輝く文字の観想とマントラ“om siddhivajra hūṃ”の読誦	162
4. および 5. 心臓に月輪の観想、および輝く一連の raṃ 字を観想	163
6. 一切罪を消失させるマントラの読誦	163
7. śūnya の観想	164
8. クンダと水晶に似たものを観る	165
9. [心月輪の] 中央に hūṃ 字と八葉蓮華を観想	165
10. 輝く一連の hūṃ 字の観想	166
11. 忿怒主を憑依させるマントラ	166
12. ムドラーを結んでマントラの読誦	167
13. 自己の尊格 (svadevatā) の思惟	168
14. マントラの六肢布置	169
15. 勧請のムドラー	173
16. 一切尊格勧請のマントラ	174
17. および 18. 閻伽のマントラ、および能引のマントラ	175
19. 方位に縛る (結界) のマントラ	177
3 結	178
参考文献一覧	179

1 序

Bhūtaḍāmaratantra という、仏教とヒンドゥー教でタイトルを共有する儀軌が存在する。本文の詳しいについては藤井 [2020] に詳しい為、ここでは割愛したい。本論文では、

Bhūtaḍāmaratantra において説かれる、マンダラの記述の後のマンダラの観想法に焦点を当てて論じていきたい。仏教版 *Bhūtaḍāmaratantra* (BBT) では第4章、ヒンドゥー教版 *Bhūtaḍāmaratantra* (HBT) では第6章で説かれている。BBT においてはこの章は *siddhimaṇḍalavidhi* と呼ばれており、前の章で説かれたマンダラの各尊格の勧請方法や観想の方法、そして尊格それぞれのマントラが説かれている。

本論文では、BBT および HBT で説かれるマンダラを用いた観想法の記述の比較をすることによって、仏教における観想とヒンドゥー教における観想法の相違点と類似点を提示したい。

2 マンダラ観想法の比較

BBT、HBT 共に、マンダラの尊格の名前や姿が説かれた後に、BBT では「マンダラ引入の儀軌」(*maṇḍalapraveśavidhi*) が説かれ、HBT では「ディークシャーの方法」(*dīkṣāvidhāna*) が説かれる。この「マンダラ引入」と「ディークシャー」の儀礼の比較から導き出される儀礼行為の異同については別稿を期したい。本稿では、その後に説かれるマンダラを用いた観想法について論じていきたい。両 BT の観想法の比較を行うことによって仏教タントラとヒンドゥータントラで共有される要素と共有されない要素の一端を明らかにしていく。

以下に両 BT のマンダラ観想法次第の大まかな対応表を提示したい。表中の通し番号は、BBT と HBT で対応する儀礼行為の記述箇所を区切って通し番号を付したものである。

通し番号	BBT	HBT
1	両手に月輪の観想	両手に月輪の観想
2	[月輪の] 中央に一連の輝くフーム字を観想	心に一連の輝く “om va” を思惟
3	マントラ読誦 “om siddhivajra hūm”	omit.
4	心臓に月輪の観想	omit.
5	輝く一連の ram 字を観想	omit.
6	一切罪を消失させるマントラの読誦 “om hana vidhvansaya hūm nāśaya pāpaṃ hūm phaṭ”	マントラの読誦 “om hana hana vidhvamsaya nāśaya pāpaṃ hūm phaṭ”
7	śūnya の観想	心臓に空虚なる自己のマントラを観想
8	クンダと水晶に似たものを観る	omit.
9	[心月輪の] 中央に hūm 字と八葉蓮華を観想	omit.
10	その (八葉蓮華の) 中央に輝く一連の hūm 字を観想	[心臓の] 中央に輝く一連の hūm 字を観想
11	[忿怒主を] 憑依させるマントラ “om krodhāveśāveśaya hūm 2 aḥ”	忿怒主を憑依させるマントラ “om krodhāveśāveśaya hūm”
12	ムドラーを結んでマントラの読誦 “om vajrāveśaya pātaya hūm”	マントラの読誦 “om vajrakrodhāveśa praveśaya hūm”
13	自己の尊格 (svadevatā) の思惟	自己の尊格 (svadevatā) の思惟

14	ムドラーを結んでマントラの六肢布置 ・頭 “om hana vajra hūm” ・頭頂 “om daha vajra hūm” ・眼 “om dīptavajra hūm” ・心臓 “om vajraṣa hūm” ・甲冑 “om dr̥ḥavajra hūm” ・武器 “om hana daha paca krodhavajra sarvaduṣṭān māraya hūm phaṭ”	マントラの六肢布置 ・頭 “om hana hana vajra hūm” ・頭頂 “om daha daha vajra hūm” ・眼 “om dīptavajra hūm” ・心臓 “om dīptabodhi hūm” ・甲冑 “om phaṭ vajram ākarṣa” ・武器 “om hana hana daha dahya krodhavajra sarvaduṣṭān māraya hūm phaṭ digbandha”
15	マンダラの尊格の勧請ムドラー	心臓から忿怒 [尊] を招くムドラー (jñānamudrā)
16	一切尊格勧請のマントラ “om vajradhara mahākrodha samayam anupālaya śīghram āgaccha hrīḥ jah hūm phaṭ svāhā”	マンダラに [尊格を] 配置するマントラ “om vajradhara mahākrodha samayam anupālaya śīghram āgacchāsanato hūm phaṭ svāhā”
17	闍伽のマントラ “om sarvadevatā prasīda hūm”	闍伽のマントラ “om sarvadevatā prasīda hūm aḥ”
18	能引のマントラ “om nāśaya sarvaduṣṭān daha paca bhasmīkuru hūm 2 phaṭ 2”	供養 (pūjā) あるいは崇拝 (arcana) のマントラ “om nāśaya sarvaduṣṭān hana hana paca bhasmīkuru hūm hūm phaṭ svāhā”
19	方位に縛る (結界) のマントラ “om vajrakrodha mahācaṇḍa bandha bandha daśadiśā hūm phaṭ”	方位に縛る (結界) のマントラ “om vajrakrodha mahācaṇḍa bandha bandha daśadiśo nibandha nibandha”
20	マンダラにおける各尊格のマントラ	マンダラにおける各尊格のマントラ

以上が BBT および HBT のマンダラを用いた観想法の対照表である。このうち、通し番号 1 の記述の前に、HBT では「これを成就するのみで、一切種類の成就がある」¹ という利益を説いているが、BBT にはこれに対応する記述は見出せない。以下より、各々の通し番号に従ってその異同を見ていきたい。

1. 両手に月輪の観想

BBT prathamam tāvad² [T1 19a3] hastadvaye³ candrama- [G 8b6] ṇḍalam⁴ bhāvayet⁵

「最初に、両手に月輪を観想すべし。」

HBT [N2 9b7] dhṛtaṃ hastadvayenā- [Bo 21b4] dau⁶ bhāva- [N3 13a7] yec candramaṇḍalam⁷ /

「初めに、両手によって、留められた月輪を観想すべし。」

1 N1 16a7, N2 9b6, N3 13a6, Bo 21b3, Ba 19a7, M p.70

2 T1 tāvat

3 A dhṛ- [A 28a3] ya; T2 dhṛdaya

4 A candamaṇḍalam; T1 candramaṇḍala; T2 candramanda- [T2 17a7] lam

5 T2 :

6 N1 dhṛtahastadvayaṃtrā- [N1 16b1] dau; M dhṛtvā hastadvayenāsau

7 N1 candramaṇḍalam; N2, Bo, Ba caṇḍramaṇḍam

次第の最初で両手に月輪を観想することは両 BT で共通している。

2. および 3. 輝く文字の観想とマントラ“om siddhivajra hūṃ”の読誦

BBT madhye⁸ hūṃkārajvālāmālākulaṃ⁹ prabhavaṃ bhāvayet¹⁰ /¹¹ idaṃ¹² ca¹³
mantram uccāra- [A 28a4] yet //¹⁴ om siddhivajra¹⁵ hūṃ //¹⁶

「[その] 中央に、生じた一連の輝くフーム字を観想すべし。そしてこの
マントラを誦すべし。『オーム 成就金剛よ フーム』」

HBT viṣaṃ¹⁷ bhayaṅkaraṃ¹⁸ bījaṃ¹⁹ jvālāmālākulaṃ hṛdi²⁰ /²¹
dhyātvā [Bo 21b5] japed amuṃ mantram²² *vakṣamāṇam²³ [N2 9b8]
śṛṇṣva²⁴ tat //²⁵

「viṣa (=om)、bhayaṅkara (=ba?) という、輝く一連の種字を心に思惟
して、怒りつつそのマントラを誦せ。その [マントラを] 聞け。」

輝く種字を観想する記述は両 BT で共通している。しかしながら、BBT では hūṃ 字の
観想であり、HBT では種字が暗号化されておりこれを解読すれば om ba となる。暗号化
の法則を説く Bīja の法則との対応では bhayaṅkara は ba (va) を示している為である。しか
し、BBT ではこの後に om siddhivajra hūṃ というマントラを提示しており、HBT にはこの
マントラは omit している。HBT が故意にこのマントラを用いなかったのか、写本の混乱
からかは不明であるが、HBT の ba は、BBT 内の siddhivajra の va 字を示していると考え
るのが妥当であろう。なお、この箇所を刊本 M は om jvālāmālāsamakulaṃ namaḥ というマ
ントラに解釈しているが、その判断の根拠は不明である (M p.75)。

8 T2 madhya

9 A hūṃkāraṃ jvālāmālākulaprabhaṃ; T1, T2 hūṃkāraṃ jvālāmālākulaprabhaṃ

10 A bhāvayat

11 T2 omit.

12 A, T1, T2 idaṃ

13 A, T1, T2 omit.

14 T1 /; T2 //

15 A sīvaya; T1 sīvajre; T2 siveya

16 T2 //

17 Bo viṣaṃ

18 N2, N3, Bo bhayaṅkaraṃ; N1 bhayakaraṃ; Ba bhayaṅkarī

19 M bīja

20 N2 yadi; Bo hṛddi

21 N1, Ba //; Bo omit.

22 N1, N2, Bo, Ba maṃtraṃ; M mantra

23 Emend. N3 vakṣamāṇam; N1 vakṣyamāṇam; N2, Bo, Ba, M vakṣyamāṇam

24 Bo śṛṇṣva

25 N1 //; Bo omit.; Ba // 33 //

4. および 5. 心臓に月輪の観想、および輝く一連の ram 字を観想

通し番号 4 および 5 の記述は、HBT に対応する記述は無く BBT のみに認められる。

BBT tataḥ sarvapāpavināśanam²⁶ *mantram²⁷ uccārayet²⁸ /²⁹ hrdaye³⁰
candramaṇḍalaṃ dhyā- [A 28a5] tvā³¹ *rakāram³² raktabindusahitam³³ *
(³⁴-jvālāmālākulaṃ dhyātvedaṃ mantram³⁴) uccā- [G 9a1] rayet³⁵ //³⁶

「それから、一切罪を消滅させるマントラを唱えるべし。心臓に月輪を
思惟して、輝く一連の赤いビンドウを伴う ra 字を思惟して、このマン
トラを誦すべし。」

HBT では、以上に説かれるような、密教において頻繁に用いられる心臓に月輪を観想する記述が見られず、ram 字の観想も説かれていない。密教における観想の「五相成身観」に見られるように、月輪の観想は密教にとって重要な観法の一つに位置付けられるが³⁷、心月輪の観想自体がヒンドゥー教において重視されていないのかどうかは更なる調査が必要である。しかし、少なくとも HBT の作者にとっては不要であると考えられてこの箇所では説かれなかったのだと推察される。

6. 一切罪を消失させるマントラの読誦

BBT (A, T2 omit- [T1 19a4] om̐ hana vidhvansaya³⁸ hūm̐³⁹ nāśaya pāpam̐⁴⁰ hūm̐ phat̐ //^A
T2 omit.)

「オーム 殺せ 破壊せよ フーム 消滅させよ 罪を フーム パット」

26 A, T1 sarvapāpavi- [T1 19a4] nāśanamantram; T2 sarvapāpavinā- [T2 17b1] sanamantram

27 Emend. G maṅtram

28 A urccārayet; T1 uccariyet

29 A //; T2 // //

30 T2 hrdaya

31 G dhyātmā

32 Emend. A, T1, T2 omit.; G cakāram

藏漢に従い rakāra に emend.

33 A, T2 kutavahaṃ bindusahitam; T1 raktavahaṃ bindusahitam

34 Emend. A jvālāmālākuvṛtaṃ mantram; T1 jvālāmākulaṃ vṛṅgamantram; T2 jvālākulavṛtamantram; G jvālāmālākulaṃ dhyātmyā tdaṃ mantram

35 T1 uccāraye

36 T1 //; T2 :

37 『初会金剛頂経』の「五相成身観」に対する各種注釈との翻訳対照に関しては高橋 [2018] を参照。月輪観の類型に関してはギープル [1981] を参照。

38 T1 vidha- [T1 19a5] nsaya

39 T1 omit.

40 G pāpa

HBT [N3 13a8] vi- [N1 16b2] ṣaṃ hanayugam⁴¹ grhya vidhvamsaya⁴² padānvitam⁴³
 //⁴⁴
 nāśayeti⁴⁵ tataḥ pāpaṃ [Ba 19a10] ⁽⁴⁶⁻kālam astrānvito⁻⁴⁶⁾ manuḥ^{47/48}
 「viṣa (= om)、一対の hana (= hana hana) を取って、vidhvamsaya (破壊せよ) という語を伴い、
 nāśaya (消滅させよ) と言って、それから pāpaṃ, kāla (= hūṃ) を、
 astra (= phaṭ) を伴った呪である。
 (om hana hana vidhvamsaya nāśaya pāpaṃ hūṃ phaṭ⁴⁹)」

BBT では、先の通し番号 4, 5 の部分でこのマントラの名称が説かれている。BBT では「一切罪を消失させるマントラ」(sarvapāpavināśaṃ mantram) としてマントラの効用を説くが HBT にはこの記述は見られない。しかしながら、HBT のマントラの暗号を解説して現れるマントラは、BBT で説かれるマントラとほぼ一致しており、その内容は「罪の消滅」である。

7. śūnya の観想

BBT tataḥ *samanantaram⁵⁰ śūnyam⁵¹ bhāvayet /⁵²⁾
 「それからすぐに空を観想すべし。」
 HBT śūnyam⁵³ * ⁽⁵⁴⁻svamantram saṃcintya⁻⁵⁴⁾ hr̥dayam krodhamaṇḍitam⁵⁵ //⁵⁶
 「空虚なる自己のマントラ⁵⁷ を、忿怒で飾られた心臓に思惟して、」

41 N2, N3 halayugam

42 N1 vidhvamsaya

43 N1, N2, Bo, Ba padā- [Bo 21b6] nvitam; M dvayānvitam

44 N2, M /; Bo omit.

45 N1 nāśayati

46 N1, N2 kālamāstrānvitam; M kālamāstrānvito

47 N1, N3, Bo, Ba manuḥ

48 N1 //; Bo omit.; Ba // 34 //

49 Bo 写本には om hana hana vidhvamsaya nāśaya pāpaṃ om hūṃ というマントラが挿入されている (Bo 21a 右下余白)。刊本 M では om hana hana vidhvamsaya vidhvamsaya nāśaya nāśaya pāpaṃ hūṃ phaṭ (M p.75)。

50 Emend. T1 samanaram; G samanantara

51 T1 śūnya

52 A, T2 omit.

53 Ba śūnyam

54 Emend. N3 kha mantram [N3 13b1] saṃcintya; N1 svamantram saṃcintya; N2, Bo, Ba svamantram [N2 9b9] ni- [Bo 21b7] tyā; Ba svamantram cityā; M svamantram cintyam

N3 写本では kha と記されるが、kha は sva と似た字体であり、かつ他写本では sva とされる為 svamantra と修正した。

55 N1, Bo, Ba krodha- [N1 16b3] maṇḍitam; N2 maṇḍitam

56 N2, M /; Bo omit.

57 BBT では svamantram ではなく samanantaram。また当箇所は BBT では śūnya の観想を行う場面であるが、HBT では仏教的な śūnya と同じ意味ではないであろう。

ここで説かれるのは仏教で特に重視される思想である śūnya の観想であり、BBT では簡潔に「空を観想すべし」と説かれる。HBT では明確な形で śūnya の観想は説かれていない。śūnya という単語は用いられているものの、HBT では形容詞として機能しているように思われる⁵⁸。

8. クンダと水晶に似たものを観る

この観想は HBT には認められず、BBT のみに認められる。

BBT punaḥ *kuṇḍasphaṭikasamkāśam⁵⁹ paśyet⁶⁰ //

「再び、クンダと水晶に似たものを観るべし。」

この記述は、チベット訳では *mdun du me tog kunda⁶¹ dang / shel lta bur bltas nas* (「面前にクンダの花と、鏡の如きものを観てから、)と説かれ、漢訳では「然後想一淨帛如軍那華如頗胝迦」(「然る後、一淨の帛の、軍那華 (kuṇḍa) の如く、頗胝迦 (sphaṭika) の如くなるを想え)」という記述に対応する。HBT にこの観想は描かれませんが、この観想が仏教に特有のものであるかは更なる調査の必要がある。

9. [心月輪の] 中央に hūṃ 字と八葉蓮華を観想

本項目も HBT には見られず、BBT のみに認められる記述である。

BBT ⁶²tato madhye hūmaṣṭadalapadmaṃ cintayet //

「それから [心月輪の] 中央にフーム [字] と八葉蓮華を想え。」

ヒンドゥー教で八葉蓮華がどれほど重視されていたかは確認が必要であるが、少なくとも HBT においてはこの観想過程は省かれている。BBT の漢訳では当該部分を「復想卍字變成八葉蓮華光明遍滿」(「復た卍字變じて八葉蓮華と成りて光明遍滿するを想え)」としており、hūṃ 字が八葉蓮華に変化したものを観想するとされる。

58 ヒンドゥー教において śūnya という語がどのような意味合いを持ち、教義の中に組み込まれているのかについては今後更に調査を必要とする。例えば、14-15 世紀の宗教者であるカビールは「シューニヤ(空)に心作用を帰入せしめれば、どうしてジャーティ(出自)を言えようか」と、śūnya という単語を用いており(橋本 [2006] p.161)、また橋本 [2006] は、「カビールとナート派ヨーガ行者にとって、「空」は「サハジャ」と同義であった。「空」は至高の真実性と、個我がその真実性と合一できる「場」の両方の意味をもっている」(橋本 [2006] p.77) と述べている。

59 Emend. A kuṇḍasphaṭikābhaṃ bodhi- [A 28b1] cittam; T1 kuṇḍasphaṭitabhaṃ bodhicittam; T2 kuṇḍasphaṭi- [T2 17b2] kabhaṃ bodhicittam; G kundendusphaṭikasamkāśam

60 T1 paśet

61 P kun dha

10. 輝く一連の hūṃ 字の観想

BBT tasya madhye hūṃkāraṃ⁻⁶²⁾ [T1 19b1] jvālāmālākulaṃ bhāvayet^{63 / 64}

「その（八葉蓮華の）中央に、輝く一連のフーム字を観想すべし。」

HBT tasya madhye⁶⁵ dhyāye- [Ba 19a11] n⁶⁶ nirañjanam^{67 / 68}

「その（自己のマントラの？）中央に、輝く一連の nirañjana (=hūṃ) を観想せよ。」

この記述は両 BT においてほぼ共通しているものであるが、HBT には「八葉蓮華」の記述が認められないため、HBT の指す tasya が何を指しているかは不明確である。おそらく、この記述の直前に説かれる、心臓に思惟した svamantra（自己のマントラ）を指しているものと思われる⁶⁹。

11. 忿怒主を憑依させるマントラ

BBT ⁽⁷⁰⁻ anena krodhāveśamantrenāveśayet /⁷⁰⁾ [G 9a2] [A 28b2] ⁽⁷¹⁻ om

krodhāveśāveśaya hūṃ 3 aḥ //⁷¹⁾

「この忿怒憑依のマントラで憑依させるべし。『オーム 忿怒憑依よ 憑依せよ フーム フーム フーム アハ』」

HBT anena [Bo 22a1] krodhamantrenā⁷² veśayet⁷³ kro- [N3 13b2] dhabhūpatim⁷⁴
//⁷⁵

[N2 9b10] tāṛāt⁷⁶ krodhāveśāveśaya⁷⁷ kūrccānviṭam⁷⁸ *mantram^{79 / 80}

62 A tato śṭapatrapadmaṃ vicintya tanmadhye hūṃkāraṃ; T1 tato 'ṣṭapatrapadma vicintya tanmadhye hūṃkāraṃ; T2 tato śṭapatrapadma vicintya : tanmadhya hūṃkāraṃ

63 A, T1, T2 cintayet

64 A //; T2 // //

65 N1 madhya

66 N1 vyāye

67 N3 nirañjanam; N1, N2, Bo, Ba nirañjanam

68 N1 //; Bo omit.; Ba // 35 //

69 HBT のこの観想方法に関して、先ず svamantra がどのようなマントラであるかが不明瞭であり、かつ具体的なイメージの難しいマントラを心臓に観想するという方法がヒンドゥー教において一般的に用いられているかが現在の所不明である。この点に関しては更なる調査が必要とされる。

70 A, T2 omit.; G krodhāveśamantrenāveśayet

71 A om krodhāveśa hūṃ hūṃ hūṃ aḥ //; T1 om mahākṛveśayet / om krodhāveśa hūṃ hūṃ hūṃ 3 aḥ //; T2 om krodhāveśa hūṃ hūṃ hūṃ a // //

漢訳は om krodhāveśa hūṃ hūṃ hūṃ aḥ であり、A に一致する。藏訳は om krodhāveśaya hūṃ hūṃ hūṃ a であり、最後を aḥ でなく a とする点では T2 に一致する。

72 N1, N2, Bo, Ba krodhamantrenā

73 N1 vidhāya; N2 vaṣayet; Ba vaśayet; M cintayet

74 N1, N2, Bo, Ba krodhabhūpatim

75 N2, Bo omit.; M /

76 N2, Ba tāṛā

77 N1 krodhāveśa- [N1 16b4] veśaya; N2 krodhāveśāveśaya; Bo krodhāveśaya; Ba krodhāveśāveśaya; M krodhāveśāveśaya

78 N1, N3 kūrccānviṭam; Bo kūrccānviṭam

79 Emend. N3 mantram; N1, Ba manum; N2 matram; Bo maṃtram; M manum

80 N1, Ba //; Bo omit.; Ba [Ba 19a12] // 36 //

「このマントラによって、忿怒主を〔自己に〕入らせよ。tāra (= om) から、krodhāveśa (忿怒憑依よ)、āveśaya (憑依せよ)、kūrca (= hūm) を伴ったマントラである (om krodhāveśāveśaya hūm⁸¹)。』

ここで両 BT は āveśa (憑依) のマントラを説いている。BBT では何を憑依させるかを明確に説いているわけではないが、HBT と同様に忿怒主 (krodhādhipati) を憑依させる次第であると考えて良いであろう。密教における āveśa に関しては種村 [2019] [2020] に詳しく、HBT の暗号化を解説した後に現れるマントラは、BBT の忿怒憑依のマントラ (krodhāveśamantra) とほぼ同じものである。

12. ムドラーを結んでマントラの読誦

BBT tataḥ⁸² krodhāveśamudrām⁸³ baddhvā⁸⁴ idaṃ mantram⁸⁵ uccārayet //⁸⁶ om
*vajrāveśāveśaya⁸⁷ pātaya⁸⁸ hūm //⁸⁹

「それから、忿怒憑依のムドラーを結んで、このマントラを唱えよ。

『オーム 金剛憑依よ 憑依せよ 入らせよ フーム』』

HBT [Bo 22a2] sañcintya⁹⁰ (91- vajrapāṇiñ ca⁹¹) krodhāveśam⁹² (93- smared dṛṣṭah⁹³)
//⁹⁴

hālāhalāl⁹⁵ likhed vajrakrodhāveśa⁹⁶ praveśaya⁹⁷ /⁹⁸

[Ba 19b1] kālabījāntam⁹⁹ uddhṛtya¹⁰⁰

81 Bo 写本の挿入されたマントラ om hūm veśāveśaya hūm (Bo 21a 下) がこれに対応するだろう。刊本 M は om krodhāṃ āveśaya āveśaya (M p.75) とする。

82 T2 tata

83 T2 krodhāveśamudrā

84 A, T2 baddhyā

85 T1 ma- [T1 19b2] m

86 T1 /; T2 //

87 Emend. A, T1 vajrāveśa āveśaya; T2 vajrāveśa āveśaya; G āveśāveśaya

漢訳では om vajrāveśa āveśa pātaya hūm、藏訳では om vajrāveśaya āveśaya pātaya pātaya hūm である。先のマントラでは krodhāveśa という語が用いられ、藏漢訳でも vajrāveśa とされているため G 写本の āveśāveśaya の記述を vajrāveśāveśaya に修正した。

88 A pātaya; T2 pāta

89 T1 /; T2 //

90 N3 sañcintya; N1 sañcintyatam; N2 sañcintya; Bo sañcintya; Ba sacimtayad

91 N3 vajrapāṇim; N1, N2, Ba vajrapāṇim; Bo vajrapāṇim ca

92 N1 krodhāveśam; N2 krodhāveśam; M khrodhādhiśam

93 N1 smarebudhaḥ; N2 smared raṣṭah; Bo smaret diṣṭah; Ba smmaredṛḥah; M smared budhaḥ

94 N2, M /; Bo omit.

95 N1, N3 hālāha- [N3 13b3] lān; Ba hālāhalā

96 N1 vaktram krodhāveśa; N2 vajrakrodhe- [N2 9b11] śa; Bo vajrakro- [Bo 22a3] dheśa ca; Ba vajrakrośeśam ca; M vajram krodhāveśam

97 N1 praveśayā; N2 praśāmaya; Bo praśāmaya; Ba praśāmaya; M praśāmaya

98 N1 //; Bo omit.; Ba // 37 //

99 N1 kā- [N1 16b5] lacakrān; N2, Bo, Ba kālabījāntam

100 N1 samuddhṛtya; M uccārya

「ヴァジュラパーニを思惟して、観想をなす者は忿怒憑依を想起せよ。
hālāhala (=om) より書くべし。vajrakrodhāveśa (金剛忿怒憑依よ)、
praveśaya (入れ)、kāla (=hūm) の種字で終わる [マントラを] 引き出
して (om vajrakrodhāveśa praveśaya hūm¹⁰¹)、」

BBT では、先の忿怒憑依のマントラを誦した後に、忿怒憑依のムドラーを結んで上に
示したマントラを誦すことが説かれている。しかしながら、HBT にはこのムドラーの記
述は認められない。その代わりに「ヴァジュラパーニを思惟して」(sañcintya vajrapāṇiṅ)
という記述が挿入されている。密教におけるヴァジュラパーニは基本的に金剛手菩薩を
指すが、HBT のこの箇所では Krodhabhairava を指していると考えるのが妥当であろう。

13. 自己の尊格 (svadevatā) の思惟

BBT tataḥ¹⁰² svadevatākāyaṃ vicinta- [T2 17b4] yet¹⁰³ //¹⁰⁴

「それから、自己の尊格の姿を思惟せよ。」

HBT cintayec¹⁰⁵ ca svadevatām¹⁰⁶ //¹⁰⁷

「自己の尊格 (svadevatā) を思惟すべし。」

本項目は両 BT 共に「svadevatā を思惟する」となっている。ここで言う svadevatā とは
BBT では Mahākrodhādhipati のことを指し、HBT では Krodhabhairava のことを指すと考え
て良いであろう¹⁰⁸。

101 Bo 写本では om vajrakrodheśa praśāmayam hūm (Bo 21a 下)、刊本 M では om vajrakrodhāveśaya praśāmayā hūm (M p.76)。

102 A tata

103 G cintet

104 T1 /; T2 :

105 N2, Bo, Ba cintayec

106 N1, N2, Bo, Ba svadevatām

107 N2, M /; Bo omit.

108 BBT における svadevatā の漢訳は「本尊」であり、藏訳は rang lha である。仏教における svadevatā の用例としては、*Mañjuśrīyamūlakalpa* (MMK) や *Caryāmelāpakapradīpa* (CMP) に svadevatā の記述を見ることが出来る。以下にその記述を挙げよう。

MMK (Skt.) (S p.414, V p.321)

madhyame parve spr̥śyotkṣipet / visarjanārghena svadevatāyā apasavyena bhrāmayet /
「関節の中央に触れて放つべし。発遣の關伽で自己の尊格より左へ動かすべし。」

MMK (Tib.) (P 223b2, D 260b6-260b7)

tshigs bar (P par) ma la mthe bos gtugs (P gtug) shing (P cing) yang dang yang bteg (D btegs) par byas nas / (P omit.) mchod yon phul na rang gi (D gis) lha gshegs su gsol bar [D 260b7] 'gyur ro //

「関節の中間に親指で触れて、何度も [指を] あげてから、關伽を捧げたならば、自己の尊格 (svadevatā) が来ることを請うのである。」

CMP (Skt.) (Wedemeyer p.476)

devyas tāḥ pratipūjyaś ca samayas tvam itīyaṃ tu vāk / sva-devatā-smaraṇāya / samayo 'ham

14. マントラの六肢布置

BBT tataḥ krodhādhipatiḥ¹⁰⁹ krodhārāja- [A 28b4] mudrayā¹¹⁰ ṣaḍaṅgavyñā- [T1
19b3] saṃ kuryāt¹¹¹ //¹¹²

「それから、忿怒主[となった修法者]は、忿怒王のムドラーによって六肢に配列(布置)することをなせ。」

HBT tatas tu krodhāmantreṇa¹¹³ [Bo 22a4] ṣaḍaṅga- [N3 13b4] nyāsam¹¹⁴ ācāret
/¹¹⁵

「それから、忿怒のマントラによって六肢に布置することをなすべし。」

マントラを六つの部分(頭、頭頂、眼、心臓、甲冑、武器)に配列することは両 BT で一致しているが、BBT ではムドラーを結んでそれを各所に当てながらマントラを読誦するものと考えられる。HBT においては、このムドラーを結ぶ作法は説かれていない。以下に、各所に配列するマントラの記述を挙げる。

iti ca vāk /

「彼の女神たちが崇拝される、その言葉が「汝は三昧耶である」(samayas tvam) というものである。自己の尊格 (svadevatā) を念ずる為には、「私は三昧耶である」(samayo 'ham) というのが言葉である。」

また、ツォンカバによる『大真言道次第論』およびケートブゼーの『タントラ類総論』にも見ることが出来る。以下にその記述を挙げたい。

『大真言道次第論』 de nas rmi lam du dkon cog gsum dang rang gi lha dang byang sems dang 'khor nram bzhi dang /ri dang [P 75b1] glang po dang 'bab chu dang nor dang gos rnyed pa sogs dga' ba'i rmi lam rmi na sgrub pa brtsam par bya'o // (P No.6210 75a8-75b1)

「それより、夢において三宝、自己の本尊、菩薩、四衆[を見]、山[に登り]、象[に乗り]、河流[を渡り]、財[を得]、衣を得る等のよろこばしい夢を見たならば[悉地の] 修法を始めるべきである。」(高田 [1978] p.358)

『タントラ類総論』 rmi lam cho ga bzhin brtags pa na / rmi lam du dkon mchog gsum dang / rang gi lha dang / byang sems dang 'khor nram bzhi dang / ri dang glang po dang / 'bab chu dang nor dang / gos rnyed pa sogs dga' ba'i rmi lam rmi na sgrub pa brtsam par bya'o / (Lessing [1978] p.202)

「もし夢を儀軌のごとくに観察するならば、夢において、三宝を[見]、自己の本尊を[見]、菩薩を[見]、四衆を[見]、山[に登るを見]、象[に乗るを見]、河流[を渡るを見]、財を[得るを見]、衣を得る[を見る]等よろこばしい夢を見たならば、[悉地の] 修法を始めるべきである。」(高田 [1978] p.365)

Lessing と Wayman は、ケートブゼーの説くこの rang gi lha を“one's own deity (svadevatā)”と訳している (Lessing [1978] p.203)。高田 [1978] はこれを「自己の本尊」と訳している。『大真言道次第論』ではこの直前でも rang gi lha の用語を用いており、「初夜に前述したごとく闍伽を奉獻して、自らの本尊を召請し、白檀等と焼香を焼いて供養すべきである」(高田 [1978] p.358) (srod la sngar bshad pa ltar mchod yon phul nas rang gi ++ drangs la / tsan da na dkar po la sogs pa dang bduḡ pas bduḡs te mchod pa bya /) (P No.6210 75a5) とされる。これらの用例も、おそらく行う修法の主尊を svadevatā として言及しているものと思われる。

109 A, T2 krodhādhipati; T1 krodhādhipateḥ

110 A krodhārājamudrāyā

111 A kuryyāt; T2 kuryyān tata

112 T1 /; T2 //

113 N1, N2, Bo, Ba krodhāmantreṇa; M krodhāmantreṇa

114 N2, Bo ṣaḍaṅganyāsam; Ba ṣaḍaṅgaṃ nyāsam

115 N1 //; Bo omit.; Ba // 38 //; M / viṣaṃ vajrayutaṃ bodhimahākālaṃ nyased dhṛdi /

刊本 M のこの挿入句は他の写本では全て netra マントラの後に位置する。

BBT om hana¹¹⁶ vajra hūṃ // śiraḥ¹¹⁷ //¹¹⁸ om daha¹¹⁹ vajra hūṃ [T2 17b5] // [G 9a3] śikhāḥ¹²⁰ //¹²¹ om dīptavajra¹²² hūṃ //¹²³ netraṃ¹²⁴ //¹²⁵ om vajraṛoṣa¹²⁶ hūṃ // hr̥dayaṃ¹²⁷ //¹²⁸ om dṛḥavajra hūṃ //¹²⁹ kavacaḥ¹³⁰ //¹³¹ om [A 29a1] ha- [T1 19b4] na daha paca [T2 17b6] krodhavajra sarvaduṣṭān¹³² mārāya¹³³ hūṃ phaṭ¹³⁴ //¹³⁵ astraṃ¹³⁵ //¹³⁶ evaṃ¹³⁷ krodharājasya ṣaḍaṅgaṃ¹³⁸ vinyāsaṃ¹³⁹ kuryāt¹⁴⁰ //¹⁴¹

「それから、忿怒主[となった修法者]は、忿怒王のムドラーによって六肢に配列（布置）することをなせ。『オーム 殺せ 金剛よ フーム』頭[のマントラ]である。『オーム 焼け 金剛よ フーム』頭頂[のマントラ]である。『オーム 輝ける金剛よ フーム』眼[のマントラ]である。『オーム 金剛臍よ フーム』心臓[のマントラ]である。『オーム 堅固なる金剛よ フーム』甲冑[のマントラ]である。『オーム 殺せ 焼け あぶれ 忿怒金剛よ 一切悪を 殺せ フーム パット』武器[のマントラ]である。是の如く、忿怒主の六肢に[マントラを]配列（布置）することをなせ。」

HB T tatas tu krodhamantreṇa¹⁴² [Bo 22a4] ṣaḍaṅga- [N3 13b4] nyāsaṃ¹⁴³ ācaret¹⁴⁴

116 A, T2 hana 2

117 A, T2 śiraśi; T1 śira

118 T2 ///

119 A, T2 daha 2

120 A, T2 śiṣā- [A 28b5] yām; T1 śikhā

121 T2 ///

122 A dīptavajra; T2 diptavajra

123 A, T1 /

124 A, T2 netrayo; T1 netra

125 T2 ///

126 A vajraṛoṣa; T1, T2 vajraṛoṣa

127 A, T2 hr̥daya

128 T2 ///

129 A, T1 /

130 A, T1, T2 kavaca

131 T2 ///

132 A, T1 sarvaduṣṭān

133 A mārāye

134 T1 /

135 A antraṃ; T1 astraṃ

136 T2 ///

137 A, T1, T2 ayaṃ

138 A, T1, T2 ṣaḍaṅga

139 A vim- [A 29a2] nyāsaṃ; T1 vinyāsaḥ

140 A, T1, T2 omit.

141 T2 :

142 N1, N2, Bo, Ba krodhamantreṇa; M krodhamantreṇa

143 N2, Bo ṣaḍaṅganyāsaṃ; Ba ṣaḍaṅgaṃ nyāsaṃ

144 N1 //; Bo omit.; Ba // 38 //; M / viṣaṃ vajrayutaṃ bodhimahākālaṃ nyased dhṛdi /

刊本 M のこの挿入句は他の写本では全て netra マントラの後位置する。

viṣaṃ hanayugaṃ¹⁴⁵ [N2 10a1] vajrakūrcādyam¹⁴⁶ (147- vinyasec chiraḥ¹⁴⁷ //¹⁴⁸
 hālāhalaṃ¹⁴⁹ dahayugaṃ¹⁵⁰ vajrakālam¹⁵¹ nyasec¹⁵² chikhām¹⁵³ [N3 13b5] /¹⁵⁴
 tāram¹⁵⁵ dīptayutaṃ¹⁵⁶ [Ba 19b3] vajramahākālāya¹⁵⁷ netrayoḥ //¹⁵⁸
 viṣaṃ¹⁵⁹ [N2 10a2] [Bo 22a5] dīptayutaṃ¹⁶⁰ bodhima- [N1 16b7] hākālam¹⁶¹
 nyased dhṛdi¹⁶² /¹⁶³
 viṣaṃ astrayutaṃ¹⁶⁴ va- [Ba 19b4] jram¹⁶⁵ ākarṣa¹⁶⁶ kavace¹⁶⁷ nya- [Bo 22a6]
 set /¹⁶⁸
 viṣaṃ¹⁶⁹ hanayugaṃ¹⁷⁰ gṛhya *dahadahyapadānvitam¹⁷¹ //¹⁷²
 krodhavajrapadam¹⁷³ tadvat [N1 17a1] (174- sarvaduṣṭān atahparam¹⁷⁴) /¹⁷⁵
 tato māraya varmāstram¹⁷⁶ digbandhāntam¹⁷⁷ ṣaḍaṅgakam¹⁷⁸ //¹⁷⁹

「それから、忿怒のマントラによって六肢に布置することをなすべし。

145 N2, Bo ha- [Ba 19b2] layugaṃ; Ba halaṃ yugaṃ

146 N1 vajrakūrcādyam; Bo, M vajram^(Bo insert to 22a4) kūrcaḍyam

147 N1 vinyase- [N1 16b6] sthiraḥ; N2, Ba vinyasechiraḥ; M vinyaset śire

148 N2, N3, M /; Bo omit.

149 N1 hālāhalaṃ

150 N3 halayugaṃ; N1 dehayutaṃ; N2 halayugaṃ

N3 では halayugaṃ であるが、BBT との対応では Bo, Ba, M の dahayugaṃ が適切であろう

151 N2 vajram kālīm; M vajram kālam

152 N1, N2 nyase; Ba, M nyaset

153 Ba śikhām; M śikhām

154 N1 //; Bo omit.; Ba // 39 //; M / viṣamantrayutaṃ vajramantraṃ ca kavacaṃ nyaset /

刊本 M のこの挿入句は他の写本では全て hṛd マントラの後に位置する。

155 N3 tāvam

156 Bo dīptayugaṃ

157 Bo vajram^(Bo insert to 22a4) mahākālāya; M vajram mahākālā ca; Ba vajramahākāla ca

158 N2, M /; Bo omit.

159 N3 viṣa

160 N1 vajrayutaṃ; N2 dīprayugaṃ; Bo bījayutaṃ; Ba vajrayugaṃ

161 Ba vajrabodhīmahākālam

162 N1, N2, Bo dhadi

163 N1 //; Bo omit.; Ba // 40 //

164 N1 asrayutaṃ; N2, Bo, Ba astrayugaṃ

165 N3 va- [N3 13b6] ktram

166 N1 āyudham

167 Ba kavacaṃ

168 N1, Ba //; Bo omit.

169 M viṣa

170 N3, N2, Bo halayutaṃ; N1 hanayutaṃ

171 Emend. N3 dahagraṣṭapādānvitam; N1 dahagrhyapa; N2 dahadahya- [N2 10a3] padānvitam; Bo dahadahyapadanvitam; Ba dahayugmapadānvitam; Ba dahayugmapadānvitam

172 N1, Bo omit.; N2, M /; Ba // 41 //

173 Ba krodhavajrayugaṃ

174 N3 sarvaduṣṭān atahpa- [N3 13b7] ram; N1 sarvaduṣṭām tathā param; N2 sarvaduṣṭāt atahparam; Bo sarvaduṣṭata- [Bo 22b1] taḥ param; Ba sarvaduṣṭān ta- [Ba 19b5] taḥ param

175 N1, Ba //; Bo omit.

176 N1, N3 vrammāstram

177 N1 digbadhāntam; N2, Bo, Ba digbandhāntam

178 N1, Bo, Ba ṣaḍaṅgakam; N2 ṣaḍamtakam

179 N2, M /; Bo omit.; Ba // 42 //

viṣa (=om)、一対の hana (=hana hana)、vajra、kūrca (=hūm) を始めとするものを頭に置くべし。(=om hana hana vajra hūm¹⁸⁰)

hālāhala (=om)、一対の daha (殺せ) (=daha daha)、vajra と、kāla (=hūm) を頭頂に置くべし。(=om daha daha vajra hūm¹⁸¹)

tāra (=om)、dīpta と結びついた vajra と、mahākāla (=hūm) の為、両眼の [マントラ] である。(=om dīptavajra hūm¹⁸²)

viṣa (=om)、dīpta と結びついた bodhi、mahākāla (=hūm) を心臓に置くべし。(=om dīptabodhi hūm¹⁸³)

viṣa (=om)、astrra (=phaṭ) と結びついた vajra、ākarsa。[このマントラを] 甲冑に置くべし。(=om phaṭ vajram ākarṣa¹⁸⁴)

viṣa (=om)、一対の hana (=hana hana) をつかんで、daha、dahya という句を伴った、

krodhavajra という句を、同様に更に sarvaduṣṭān [という語] を、

それから、māraya、varma (=hum)、astra (=phaṭ)、digbandha で終わるのが六肢 [のマントラ] である。(=om hana hana daha dahya krodhavajra sarvaduṣṭān māraya hum phaṭ digbandha¹⁸⁵)」

HBT では全てのマントラが暗号化されて説かれるが、それを解読した形は一部を除いて BBT とほぼ一致している。

180 Bo 写本上部には om hala hala vajra hūm śirase svāhā というマントラが挿入されている (Bo 22a 上部)。刊本 M では om hana hana vajra hum śirase svāhā (M p.76)。

181 Bo 写本には om daha daha vajra kālam śikhāyāyai というマントラが挿入される (Bo 22a 上部)。刊本 M では om daha daha vajra hum śikhāyaivaṣaṭ (Bo 22a 上部)。なお、BBT で daha という語を二度繰り返す記述を持つのは A と T2 写本である。

182 Bo 写本には om dīṣa dīptavajram mahākāya netrane というマントラが挿入される (Bo 22a 上部)。また、Bo 21a 下部には om hūm dīptayagam というマントラも見られるが、このマントラは誤って記入したものである可能性がある。刊本 M では om dīptaṃ vajra hum netrayāya vaṣaṭa (M p.76)。

183 Bo 写本には om dīptim dīptim bodhimahākāla hr̥davāya (Bo 22a 上部) というマントラが挿入されている。刊本 M では om vajrabodhi hr̥dayāya svāhā (M p.76) が対応するだろう。また、文法的には dīptabodhir あるいは dīptabodhe が適切であろう。このマントラは BBT に対応しておらず、他写本の読みの om vajrabodhi という読みの方が BBT には近いものである。

184 Bo 写本には om phaṭ phaṭ vajram ākarṣa kavacam (Bo 22a 上部) というマントラが挿入される。刊本 M では om phaṭ vajra phaṭ kavacāya hum (M p.76) とされる。先のマントラと同様、このマントラは BBT と対応していない。

185 Bo 写本には om hala hala gr̥hya gr̥hya daha krodhavajra sarvaduṣṭān māraya mara hūm phaṭ (Bo 22a 右余白) というマントラが示される。また刊本 M では om hana hana daha daha krodhavajra sarvaduṣṭān māraya māraya hum phaṭ svāhā astrāya phaṭ (M p.76)。本マントラを BBT と対照した際、hum phaṭ で終わるのが適当であると思われる。しかしながら、その後続く digbandha という語に対応する種字が不明であり、そのままこの語をマントラの末尾に加えた。

15. 勧請のムドラ―

BBT tato maṅḍaladevatām¹⁸⁶ *āvāhayet¹⁸⁷ /¹⁸⁸ [T2 17b7] anyonyāntaritam¹⁸⁹ kṛtvā
tarjanīdvayam¹⁹⁰ kuñcayet¹⁹¹ /¹⁹² anena¹⁹³ *mudrāmantrena¹⁹⁴ yojayet¹⁹⁵ //¹⁹⁶

「それから、マンダラの尊格を勧請すべし。相互に遮られた[手]をなして、兩人差し指を曲げるべし。このムドラ―とマントラを組み合わせるべし。」

HBT anyonyāntaritam¹⁹⁷ muṣṭim¹⁹⁸ [N2 10a4] kuñcayet¹⁹⁹ tarjanīdvayam²⁰⁰ /²⁰¹
vi- [Ba 19b6] khyātā²⁰² jñā- [N3 13b8] namudreyam²⁰³ hrdayāt²⁰⁴ (205) krodham
āhvayet²⁰⁵ /²⁰⁶

「相互に遮られた手を[なして]、兩人差し指を曲げるべし。

これは、ジュニャーナムドラ―として知られる。心臓から忿怒[尊]を招くべし。」

ここで説かれるムドラ―は、両 BT 共に鉤召印と考えて良いであろう。共に尊格の勧請を行う次第であるが、HBT ではこの印が jñānamudrā と名付けられている。また、ここで着目すべきは HBT が「心臓から krodha を招くべし」としている点である。BBT にはこの記述は見られず、単に āvāhayet 「勧請すべし」とされる。HBT の記述における krodha は、おそらく本尊である Krodhabhairava のことを指しており、自己に憑依した忿怒主を心臓から招くという行為であると考えられる。

186 A, T1 maṅḍaladevatāhrdayam; T2 maṅḍaladevatāhrdayam

187 Emend. A, T2 ākārayet; T1 āṅkalayet; G āvāhayet

188 A //; T2 omit.

189 T1 a- [T1 19b5] nonyāntaritam; T2 anyonyāntari; G anyonyām- [G 9a4] ntaritam

190 A, T2 tarjanībhyāñ ca; T1 tarjanīdva

191 A, T1 ku- [A 29a3] ñcitā

192 T2 :

193 A aneyā; T1, T2 anayā

194 Emend. A, T1 mudrayā mantreṇa; T2 mudrayā mantrena; G mudrāmantreṇa

195 A, T1 viyojayet; T2 vijoyayet

196 T2 // //

197 N1 anyonyāntaritam; N2 anyonyāntaritam; Bo anyonyāntaritam; Ba anyonyāntaritam; M anyo`nyāntaritam

198 N3 muṣṭim

199 N1, N2, Ba kuñcayet; Bo kuñcayet

200 N2, Bo ta- [Bo 22b2] rjanīyutam; N3 tarjanīyutam; Ba tarjanīyugam; M tarjanīyugam

201 N1, Ba //; Bo omit.

202 N1 vi- [N1 17a2] śyāto

203 N1 kālamudreyam; M krodhamudreyam

204 N2, Bo, Ba hrdayā

205 N3 krodham ānayet; N1 krodhasāttayet; Bo krodham uddharet

206 N1, N2 //; Bo omit.; Ba // 43 //

16. 一切尊格勧請のマントラ

BBT oṃ vajradhara mahākrodha²⁰⁷ samayam²⁰⁸ anupā- [T2 18a1] laya²⁰⁹ śī- [A 29a4] ghram²¹⁰ āgaccha²¹¹ hrīḥ jaḥ²¹² hūṃ phaṭ²¹³ svā- [T1 20a1] hā //²¹⁴ anena²¹⁵ sarvadevatām²¹⁶ āvāhayet²¹⁷ //²¹⁸

「『オーム 金剛持よ 偉大なる忿怒よ 三昧耶を 保持せよ 速やかに 来たれ フリーヒ ジャハ フーム パット スヴァーハー』 これによって一切尊格を勧請すべし。」

HBT viṣaṃ vajradharād²¹⁹ ṛghya mahākrodhapadam²²⁰ tataḥ²²¹ samaye- [N2 10a5] ti²²² pa- [Ba 19b7] dād²²³ ṛghya²²⁴ manupāla- [N3 14a1] ya coddharet²²⁴ /²²⁵

(Bo omit. śīghram āgacchāsanato²²⁶ varmāstram²²⁷ jvalanāṅganāḥ²²⁸ //²²⁹

anena maṇḍale²³⁰ sthāpya²³¹ tato 'rghyamanum²³² uddharet / -Bo omit.)

「viṣa (=oṃ)、vajradhara よりつかんで、次に mahākrodha の句を、samaya という句より取りて、また manupālaya を抽出すべし。

śīghram、āgacchāsanato、varma (=hūṃ)、astra (=phaṭ)、jvalanāṅganāḥ (=svāhā) [を抽出すべし]。

(=oṃ vajradhara mahākrodha samayam anupālaya śīghram āgacchāsanato hūṃ phaṭ svāhā²³³)

207 T2 mākrodha

208 A samayem

209 G anupāla. 藏漢に従って A, T1, T2 の記述を採った

210 T1 śīghram; T2 śrighram

211 A, T1, T2 āgata

212 A, T1, T2 jaṃ

213 T1 phaṭ phaṭ; T2 pha

214 T1 /; T2 //

215 A anena mantreṇa; T2 anena mantrena

216 A, T1 sarvadevatām

217 A avohayet

218 T2 //

219 N1 vajrapadām; Bo vajram dharād; M vajradharāda

220 Bo mahā- [Bo 22b3] krodham padam

221 N1, Ba //; Bo omit.

222 M samayeti

223 N1 padā

224 N1, Ba manupālayam uddharet; N2, Bo manupālaya samuddharet; M hy anupālayam uddharet

225 N1, Ba //; Bo omit.

226 N1 āgachām sananā; N2 āgachām sanamato; Ba āgachāsanato; M āgachasi padam

227 N3 varmmāstra; N1 varmmāstram; N2 varmāstra

phaṭ を示す語は astra であるため、Ba, M の記述を採った

228 N1, N2 jvalatām gatā; Ba jvalanāṅganā; M jvalanapriyā

229 N2, M /

230 N2 maṇḍale

231 M sthāpyam

232 N3, N2 rghya- [N2 10a6] manum; N1 rghamanum; Ba rghyam [Ba 19b8] manum

233 HBT で āsanato となっている箇所は、BBT では hrīḥ jaḥ あるいは hrīḥ jaṃ となっている。また、マン

これ（マントラ）によって、マンダラに「尊格を」配置して、次に閻伽の呪を抽出すべし。」

BBT ではこのマントラによって「尊格を勧請すべし (āvāhayet) と説くのに対し、HBT では「マンダラに配置して (sthāpya)」としている点に若干の異なりがあるが、暗号解読後の HBT のマントラは BBT にほぼ一致している。

17. および 18. 閻伽のマントラ、および能引のマントラ

BBT om sarvadevatā²³⁴ prasīda²³⁵ hūṃ²³⁶ //²³⁷ [T2 18a2] arghaḥ²³⁸ //²³⁹
om nāśaya²⁴⁰ sarvaduṣṭā- [G 9a5] n²⁴¹ daha paca bhaśmīkuru²⁴² hūṃ 2²⁴³ phaṭ
2²⁴⁴ //²⁴⁵ ākṣepaḥ²⁴⁶ [A 29b1] //²⁴⁷

「『オーム 一切尊格は どうか フーム』 閻伽 [のマントラ] である。

『オーム 消滅させよ 一切悪を 焼け あぶれ 灰となせ フーム

フーム パット パット』 能引 [のマントラ] である。」

HBT viṣāt²⁴⁸ [N1 17a4] sarvapadād²⁴⁹ devatāpadam²⁵⁰ samudīrayet²⁵¹ /²⁵²
prasīda⁽²⁵³⁾ kālābījan tu⁽²⁵³⁾ *savisargāntacaṇḍikām²⁵⁴ /²⁵⁵

a- [Bo 22b5] ne- [Ba 19b9] na dā- [N3 14a3] paye- [N2 10a77] d *argham²⁵⁶

トラの暗号化と解読法である mantra-uddhāra の法則として、ある音を表す際に「意味の近い異なる単語を用いることが可能」という法則がある。Bījanighaṇṭu や Bijābhīdhāna では“svāhā”という音を示す単語は“jvalanavallabhā”であるが、このマントラでは“jvalanāṅganā”とされる。これは vallabhā が“be loved female”や“wife”の意味を持ち、“aṅganā”が“woman”や“female”という意味を持つ為、交替されたと考えられる。

234 A sarvadevatā; T1 sarvadevatā

235 A, T2 pra- [A 29a5] siddha; T1 prasiddha

236 A, T2 aḥ 3; T1 a 3

漢訳では om sarvadevatā prasīda hūṃ であり G 写本の記述に一致する。蔵訳は om sarvadevitā prasīdha hūṃ a であり、G 写本と T1 写本の混ざった形であると言える。

237 T1 /

238 A, T1, T2 argha

239 T2 // //

240 T2 nāśaya

241 A, T1 sarvaduṣṭān

242 A, T2 bhaśmīḥ kuru

243 T1, T2 hūṃ

244 A omit.; T1, T2 phaṭ

245 T1 /

246 A ājepamantraḥ; T1 ākṣepamantraḥ; T2 ākṣepamantra

247 T2 // //

248 N3 viṣāt; N1 viṣāviṣā; M viṣam

249 N3 sarvapadād; N1 sarvapadām; Bo, Ba sarva- [Bo 22b4] padā

250 N1 devatāpadam

251 N1 īrayet

252 N1, Ba //; Bo omit.

253 N1, N2, Bo, Ba kālābījan tu; M kālābījāntām

254 Emend. N3 savisarggāntacaṇḍikām; N1 savisarggāntacaṇḍikām; N2, Bo, Ba savisargāntacaṇḍikām; M savisargāntu caṇḍikām

255 N1, Ba //; Bo omit.

256 Emend. N3 argham; N1, N2, Bo, Ba M arghyam

pūjārtham²⁵⁷ manum u- [N1 17a5] ddharet /²⁵⁸
 viṣabījaṃ samuddhṛtya²⁵⁹ nāśayeti padan²⁶⁰ tataḥ /²⁶¹
 [Bo 22b6] sarvaduṣṭān²⁶² hanayugam²⁶³ [N1 17a6] paca²⁶⁴ [Ba 19b10]
 bhasmī²⁶⁵ tataḥ kuru /²⁶⁶
 mahākā- [N2 10a8] ladvayam²⁶⁷ cāstram śivāntas²⁶⁸ (269- cārcanam manuḥ²⁶⁹)
 /²⁷⁰

「viṣa (= om)、sarva という句から、devatā という句を述べるべし。
 prasīda、kāla の種字 (= hūṃ)、ヴィサルガを伴った caṇḍikā で終わるもの (= aḥ) を [抽出すべし]。 (= om sarvadevatā prasīda hūṃ aḥ)
 これ (マントラ) によって闍伽を捧げさせるべし。供養の為の呪を抽出すべし。

viṣa という種字 (= om) を抽出して、それから nāśaya という句を、
 sarvaduṣṭān、一対の hana (= hana hana)、paca、それから bhasmīkuru、
 そして mahākāla (= hūṃ) を 2 度、astra (= phaṭ)、śiva (= svāhā) で終わるのが崇拜の呪である。(= om nāśaya sarvaduṣṭān hana hana paca bhasmīkuru hūṃ hūṃ phaṭ svāhā)²⁷¹」

HBT の解説されたマントラと、BBT のマントラを比較すれば、両 BT における闍伽のマントラがほぼ共通していることが分かる。その次に説かれるマントラに関しては、両 BBT でマントラの捉え方が異なっている。BBT では ākṣepa (能引) のマントラと定義する一方で、HBT では供養 (pūjā) あるいは崇拜 (arcana) のマントラとされている。

257 N3 pūjārtham; N2 pūjārtha

258 N1, Ba //; Bo omit.

259 Ba samudhṛtya

260 N1, N2, Bo, Ba, M padam

261 N1 / (yaṃta kālabījaṃ tu savisarggān tu caṇḍkam /) //; Bo omit.; Ba //

N1 の記述は、これより前の偶頌を誤って書写したものであろう。書写者は誤って書写した為、この箇所を丸括弧で括っている。

262 N3 sarvaduṣṭān

263 N3 hala- [N3 14a4] yugam; N2 hanayutam; Bo yugam; M hanayuga

264 N2, Bo paṃca

265 Bo rasmī

266 N1, Ba //; Bo omit.

267 Ba mahākālapadam

268 N1, N2 śirontam; Bo, Ba śiroṃtam; M śivo 'ntam

269 N1, M arcanīmanuḥ; N2 acanīn manuḥ; Ba arcanāmanuḥ; Bo arcanama- [Bo 22b7] nuḥ

270 N1, N2, Ba //; Bo omit.

271 本マントラは Bo 写本には om nāśaya sarvaduṣṭān hala om karu hūṃ hūṃ svāhā (Bo 23a 上部) とされ、刊本 M では om nāśaya sarvaduṣṭān hana hana paca paca bhasmīkuru hūṃ hūṃ phaṭ svāhā // (M p.77)。

19. 方位に縛る (結界) のマントラ

BBT om vajrakrodha²⁷² ma- [T1 20a2] hācaṇḍa ba- [T2 18a3] ndha bandha²⁷³
daśadiśā hūm phaṭ //²⁷⁴ diśābandhaḥ²⁷⁵ //²⁷⁶

『『オーム 激怒する金剛忿怒よ 縛れ 縛れ 十方に フーム パッ
ト』方位(地)に縛る [マントラ]である。』

HBT tārā²⁷⁷ vajraṃ⁽²⁷⁸⁻ ca krodhena⁻²⁷⁸⁾ mahāca- [N3 14a5] ṇḍapadaṃ²⁷⁹ tataḥ /
[Ba 19b11] bandhadvayaṃ²⁸⁰ [N1 17a7] tato datvā²⁸¹ daśadiśo²⁸² [Bo 23a1]
nibandhadvayaṃ²⁸³ //²⁸⁴

[N2 10a9] *diśābandhamanuḥ²⁸⁵ prokto⁽²⁸⁶⁻ vakṣye maheśvaraṃ⁻²⁸⁶⁾ manum²⁸⁷
[N3 14a6] //²⁸⁸

『tārā (= om) から、vajrakrodhena、mahācaṇḍa の句を、次に、
2度の bandha (= bandha bandha) を与えて、daśadiśo、2度の nibandha (=
nibandha nibandha)。

(= om vajrakrodhena mahācaṇḍa bandha bandha daśadiśo nibandha
nibandha²⁸⁹)

方位に縛る呪が説かれた。[次に] マヘーシュヴァラの呪を説こう。』

このマントラが diśābandha (結界) のものであることは両 BT 共通している。また、そのマントラも若干の差異があるがほぼ同一のものであることが分かる。この後に説かれる Mahādeva から始まるマンダラの各尊格のマントラに関しては本稿では割愛する。

272 A, T1, T2 vajramahākrodha

273 A, T1, T2 2

274 T1 /

275 A diśābandhamantraḥ; T2 diśābandhamantra

276 T2 // //

277 N3 tārā; Bo tārā

278 Bo ca krodham ca; M samuddhṛtya

279 N2, Bo, Ba mahācaṇḍapadaṃ; M mahācaṇḍipadaṃ

280 N3 bahvadvayaṃ; N1 vajradvayaṃ; N2 vadhyadvayaṃ; Bo vādhyādvayaṃ; Ba bandhadvayaṃ

281 N1 gatvā; M dattvā

282 Ba daśadig

283 Emend. N3 nibandhadvayaṃ; N1 kaṭidvayaṃ; N2, Bo niruḍhaya; Ba śodhayadvayaṃ; M nirūḍhaya

N3 の記述では韻律が崩れ、母音数が多い。BBT ではここは hūm phaṭ であるが、これに対応する記述の写本はない。

284 N1, Ba //; Bo omit.

285 Emend. N3 diśābandhamanu; N1 diśāvamḍhamanuḥ; N2, Ba diśābandhamanuḥ; Bo diśābandhamanu; M digbandhamanuḥ

286 N3 prājāpatya; N1 prajalentya

287 N1 manusmṛtaḥ; N2, Bo manuḥ; Ba manum; N3 manuḥ smṛtam

288 N1, Ba, N3 //; Bo omit.

289 Bo 写本では om vajrakrodhena mahācaṇḍa vāṃdha daśadiśo niruḍhaya (Bo 23a 左) であり、刊本Mは om vajra mahācaṇḍi bandha bandha daśadiśo nirūḍhaya // (M p.77)

3 結

以上に見てきたように、BBTとHBTのマンドラを用いた観想次第は大枠では似通ったものであるが、いくつかの異なりも認められた。着目すべき主要な差異は以下のものである。

- ① HBTにおける心月輪の観想の欠如
- ② HBTにおける空の観想の欠如
- ③ HBTにおけるクンダと水晶の如きものの観想の欠如
- ④ HBTにおける八葉蓮華の観想の欠如
- ⑤ 尊格を勧請してくる場の相違

両BT間のマンドラの観想次第における相違点は、その多くが仏教版に認められる記述がヒンドゥー教版に認められない、という点にあることが分かる。また、BBTで一行で示されるマントラがHBTでは複数行用いて暗号化されて説かれている為、HBTではそこに紙数が割かれている。

①および②は、特に仏教で重視される思想あるいはそれに基づいた観想方法であり、HBTに共有されなかったと言えよう。それはśūnya（空）の観想や、菩提心を象徴する心月輪の観想である。

⑤は、特に観想方法としての差異が顕著なものであり、HBTでは自己に憑依した尊格を心臓から招きだしている。BBTではどこから尊格を勧請してくるかは明確に説かれていないが、仏教の密教においては尊格を召請する場合には各尊格のいる場所から尊格を招くことが一般的である。例えば金剛智訳とされる『佛説七俱胝佛母准提大明陀羅尼經』²⁹⁰では阿迦尼瑟吒天宮中から准提佛母を勧請すると説かれている²⁹¹。

では、ヒンドゥー儀礼の場合にはどこから尊格を勧請するのであろうか。ヒンドゥー儀礼中のāvāhana（召請）の例を挙げてみたい。リングを供養（pūjā）する儀礼では、リングにシヴァ神を招き入れる際にはマントラを自己の頭頂上にあるdvādaśāntaに上昇させる。このdvādaśāntaは頭頂から親指12個の距離にあるとされる。マントラは上昇して

290 大正 No. 1075. この経は開元 18 (730) 年の『開元釋教録』中には『七俱胝佛母准提大明陀羅尼經一卷 大唐南天竺三藏金剛智譯新編入録第二譯』（大正 No. 1075: 599c21-599c22）として出ている。

291 これは尊格が乗る乗り物を観想して、その乗り物に尊格が乗って行者の前に来ることを請う記述であり、「此の契を結び、心に阿迦尼瑟吒天宮中の毘盧遮那如來を十地菩薩の圍繞する集會中を想い、准提佛母聖者を請え」（大正 No. 1075: 176a17-176a18）と説かれる。また、不空による異訳の『七俱胝佛母所説准提陀羅尼經』（大正 No. 1076）にも「七寶車輅を想え。佛部使者は七寶車輅を駕御し、空に乗りて去る。色界頂の阿迦尼吒天の毘盧遮那佛の宮殿中に至る。眞言を誦すること七遍なり。眞言に曰はく 唵觀瞻觀瞻吽_ḥ 眞言を誦し、印を結し加持するに由るが故に、七寶車輅は色界頂に至りて、准提佛母并に八大菩薩及び諸聖衆眷屬圍繞して七寶車輅に乗る」（大正 No. 1076: 181b20-181c7）と説かれ、akanīṣṭha 天から招くことは一致している。

Paramaśiva と一体となり、自己の身体まで戻してきた後²⁹²、手を心臓の位置に下げて行者の右の鼻孔から出してリングに移される²⁹³。この記述から考えれば、尊格は行者の身体を通して dvādaśānta から招請されると言えよう²⁹⁴。HBT における、心臓から尊格を招きだすという記述は、恐らくこのような伝統に沿った為に修正を加えられた形だと考えられる。このように、マンダラ観想次第において一つの重要な位置を占めている勧請の方法には両 BT 中に差異が認められた。その差異は、各宗教の伝統的思想や教理に基づいている為、お互いの宗教にとって「共有されない要素」とみなされたと言い得る。

以上のように、両 BT の比較を通して、ほぼ同内容の文献であるけれども仏教とヒンドゥー教各々によって重視される思想や共有され得ない思想の一部が明らかとなった。また、マントラに関しては、多くが共有可能なものであるとも言い得るのである。

参考文献一覧

一次資料

BT *Bhūtaḍāmaratantra*

BBT Buddhist *Bhūtaḍāmaratantra* 仏教版『ブータダーマラ・タントラ』

サンスクリット写本 Āśā Archives DPN0.3695 (A1). Matsunami No.274 (T1), No.273 (T2). Bandurski No. Xc14/50 (G).

チベット訳 D No.747. P No.404. sTog Palace No.698 (sT). Phug Brag No.519 (Ph).

漢訳 T No.1129.

HBT Hindu *Bhūtaḍāmaratantra* ヒンドゥー教版『ブータダーマラ・タントラ』

サンスクリット写本 NGMCP No. B134-12 (N1), No. B135-45 (N2), No. A167-6 (N3). Bhandarkar No.295 (Bo). Baroda Acc. No.9168 (Ba).

刊本 Mishra, G. R. 2016. *Bhūta-Ḍāmara tantra*. Varanasi: Chaukhamba Surbharati Prakashan. (M)

MMK *Mañjuśrīyamūlakalpa*

S Śāstrī, T. G. (edit.) 1920-1925. *The Āryamañjuśrīmūlakalpa*. part.I-III.

V Vaidya, P. L. 1964. *Mahāyānasūtrasaṃgraha*. part.II. Buddhist Sanskrit Texts No.18. The Mithila Inditute of Post-Graduates Studies and Research in Sanskrit Learning.

D 東北 No.543

P 大谷 No.162

大正 No.1191 『大方廣菩薩藏文殊師利根本儀軌經』

CMP *Caryāmelāpakapradīpa*

Christian K. Wedmeyer. 2007. *Āryadeva's Lamp that Integrats the Practices (Caryāmelāpakapradīpa)*. The American Institute of Buddhist Studies.

SvT *Svacchandatantra*

Madhusudan Kaul Shastri (edit). 1921. *Swacchanda-Tantra with Commentary by Kshemarāja*. Kashmir Series of Texts and Studies. No.XXXI. Nirnaya Sagar.

292 Richard [1991] p.128. dvādaśānta に関する図は Richard [1991] p.130 参照

293 Richard [1991] p.132

294 また、成立が9世紀以前に遡る可能性があるるとされる *Svacchandatantra* の「同様に、niškala (= Paramaśiva) を身体に招請して」という記述に対して、Kṣemarāja は dvādaśānta から招請するという注を付している (SvT 2: 53)。

二次資料

- 高田仁覚 1978 『インド・チベット真言密教の研究』 密教学術振興会
- 高橋尚夫 2018 「『金剛頂経』和訳(二)」『豊山学報』 61: 1-68
- 種村隆元 2019 「*Sarvatathāgatattvasaṃgraha* における āveśa について」『密教学研究』 51: 31-53
- 種村隆元 2020 「*Sarvatathāgatattvasaṃgraha* の説く āveśa 儀礼—金剛界大マンドラ章「成就が生じるための印に関する智」校訂テキストおよび和訳注」『智山学報』 69: 71-97
- 橋本泰元 2006 『インド中世民衆思想の研究』 ノンブル社
- 藤井明 2020 『インド密教文献における仏教・ヒンドゥー教間の相克と調和—*Bhūtaḍāmaratantra* を中心として』(博士学位論文、未出版)
- ロルフ・ギーブル 1981 「密教的実践における象徴をめぐる試論—月輪観を中心に」『東洋学術研究』 20 (2) : 173-198
- Lessing, F. D. 1978. *Introduction to the Buddhist Tantric Systems*. Motilal Banarsidass.
- Richard H. Davis. 1991. *Ritual in an Oscillating Universe: Worshipping Siva in Medieval India*. Princeton University Press.

キーワード： *Bhūtaḍāmaratantra*、マンドラ、観想、密教儀礼、ヒンドゥー教儀礼

本論文は東洋大学井上円了記念研究助成の成果の一部である。